教科専門教員との協働による音楽授業
―中学校音楽科における歌唱の授業実践から―

Considering the cooperation with a subject professional teacher and a school music teacher.

鈴木　愛美，中村　正之，伊野　義博

Ⅰ　問題意識と目的

同じ音楽表現に携わる大学の教科専門教員と中学校の音楽科教員ではあるが，両者の音楽表現に対する視点や考え方，方法論は，必ずしも同じとは言えない。一つの傾向として，前者は，基本的にプロの演奏家として，演奏活動も行い，芸術的な視点から自らの表現力を高め，それを基本として指導を展開する。一方，後者は，学校教育の枠組みの中で，学習指導要領を基本とした資質・能力の育成を目指す。

現行学習指導要領の表現領域歌唱分野で目指す具体的な資質・能力は，中学校第1学年を例にとると，次の３点に集約される。

ア　歌詞の内容や曲想を感じ取り，表現を工夫して歌うこと。
イ　曲種に応じた発声により，言葉の特性を生かして歌うこと。
ウ　声部の役割や全体の響きを感じ取り，表現を工夫しながら合わせて歌うこと。

これらを支えるものとして，〔共通事項〕ア，イが示されている。

ア　音色，リズム，速度，旋律，テクスチュア，強弱，形式，構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること。
イ　音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて，音楽活動を通して理解すること。

なお，平成29年３月に告示された新学習指導要領では，育成を期される資質･能力が，「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で示され，これに従い各分野における指導事項も「知識」「技能」「思考力，判断力，表現力等」の枠組みで整理された。しかし基本的な内容は，現行と共通している。また，２，３学年においては，「曲の背景との関わり」についての理解も求められる。このことは，教科目標における「生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成とも深く関係しており，一つの曲を歌唱表現する学習で，その曲の背景や生活や文化との関わりについての理解が必要であり，そのことが深い学びにつながることを意味している。

さて，すでに森脇（1979）は，教員養成における専門教育については，小中学校等の教育現場，音楽授業との関係性の中で考える必要があることを指摘している。またこの指摘は，2012年８月の中央教育審議会答申にある，「『教科に関する専門的理解』を十分身に付ける」こと，「この際教科の実際に即した内容とするため，『教科に関する科目』と『教職に関する科目』を架橋する内容を展開する」こと（p.10）といった事柄も深く関係している。

音楽表現の本質的な内容が，学校の音楽授業と深く結びつき，児童生徒の表現能力の向上につながること

2017.10.23　受理

が求められている。

教科専門教育と学校の音楽授業とのあるべき姿はどのようなものであろうか。それを明らかにするには，様々なアプローチが考えられるが，本稿では，教科専門教員が，中学校の音楽授業にゲストティーチャー及びアドバイザーの立場で参加し，そのことが，教科専門教員と音楽授業担当教員相互にどのような影響を及ぼすのか，双方の認識の共通点や差異，学習者の反応等から明らかにし，ひいては，教科専門科目と教育現場との相互向上のための視点を見出したい。

以上の問題意識から，本稿の目的は次の2点に集約される。

① 中学校の音楽授業における歌唱表現活動に対して，教科専門というフィルターを通して見た際の教科専門教員の気付きやアドバイスについて，その内容と傾向をまとめるとともに音楽科教員の視点と比較し，差異や共通点を明らかにすること。

② これらの検討から，歌唱表現の充実を核に，教員養成における教科専門科目及び中学校音楽科授業双方に対する示唆を得ること。

Ⅱ　計画と方法

1　全体計画

新潟大学教育学部附属長岡中学校音楽科教諭中村正之と新潟大学教育学部音楽科声楽担当の鈴木愛美，同音楽教育担当の伊野義博による協働の授業を行う。また，授業後生徒に対してアンケートをし，学びの内容をまとめる。個々の担当は，以下のようなものである。対象学年は，2学年，教材は，ナポリ民謡《サンタルチア》とした。

中村正之：授業計画の立案，実践

鈴木愛美：ゲストティーチャー及び生徒へのアドバイザーとして授業に参加

伊野義博：授業計画の立案，参観

授業後は，授業の内容に対して三者で検討会を行うとともに，生徒へのアンケート調査も参考にしつつ，目的にせまる。

2　教科専門科目担当教員の背景

本研究においては，声楽を専門とする鈴木の専門的な背景が重要となるので，以下概略する。

〈鈴木愛美　ソプラノ〉

国立音楽大学卒業，同大学院及び新国立劇場オペラ研修所修了。文化庁新進芸術家海外研修員としてミラノ留学。野村財団奨学生，ローム・ミュージックファンデーションの助成にて，ウィーン国立音楽大学院を最優秀成績で修了。シェーンブルン宮殿劇場，楽友協会コンサート，新国立劇場「サロメ」「魔弾の射手」，びわ湖ホール「リゴレット」，飯守泰次郎指揮「天地創造」，宮本文昭指揮「カルミナブラーナ」，パスカルヴェロ指揮「フォーレレクイエム」，船橋洋介指揮，東京フィルハーモニー交響楽団，東京都交響楽団との「夢づくりコンサート」等に出演。留学帰国記念リサイタル開催や，秋川雅史氏とのコンサート共演，ラフォルジュルネ新潟音楽祭，今年は，長岡市姉妹都市締結10周年，ドイツ・トリアー市にて記念演奏会にも出演，オペラやコンサートで活躍中。飯塚新人音楽コンクール大賞，文部科学大臣賞，朝日新聞社賞。新潟大学音楽科専任講師。二期会会員。

3　授業計画

実際に計画した授業は，以下の学習指導案による。実施日は，平成29年9月8日（金），授業者は，中村正之，鈴木愛美，対象は，新潟大学教育学部附属長岡中学校2年2組である。

1)　題材名　　明るい声で曲の特徴を生かした表現をしよう
　　＜教材＞《サンタ　ルチア》（ナポリ民謡）

2)　ねらい　　範唱や仲間の歌声を聴いてその良さを感じ取る活動を通して，曲の特徴を生かし，伸びやか

な発声で歌うことができる。

3)　指導構想

⑴　題材及び教材について

歌唱において，伸びやかな声でいきいきと表現する子供の姿を大切にしたい。例えばイタリアの伝統的な歌唱法であるベルカントbel cantoは，喉に無理なく低音から高音まで，気持ちよくのびやかに歌える唱法であり，こうした発声の方法を習得した子供は，曲の特徴を生かしながら自己の思いを豊かに表現することができる。学習指導要領では２・３年生において，「曲種に応じた発声や言葉の特性を理解して，それらを生かして歌うこと」とあり，楽曲の特徴を表現するために，曲種に応じた発声や言葉の特性を理解し，それらを生かして歌う能力を高めることをねらっている。

そこで，教材としてカンツォーネの代表的な曲である《サンタ　ルチア》を用いる。強弱変化がダイナミックであり，フェルマータも付されていることから，おおらかに歌い上げることが期待できる。発声の仕方や発音，音色などに着目することで，さらに豊かな表現を追求できる楽曲である。

⑵　生徒について

本題材で対象とする2年2組（男子22名，女子17名）は明るく活発な雰囲気をもつ学級である。音楽の授業に対しての興味や関心が高く，学習への意欲的な取組が見られる。歌唱の授業ではパートごとに進んで練習を進め，音程を把握して歌うことができる。しかし，女子は高音の響きが弱く，音域が上がるにつれて声が細くなってしまう。表情が乏しく口腔の開け方が不十分なため，声量も乏しい。一方，男子は姿勢や体の使い方への意識が乏しく，声が固くなってしまいがちである。

通常，教材曲と出会い，その魅力に気づいた子供は，「こんなふうに歌いたいな」という思いや憧れをもち，練習を重ねていく。すると子供の中に「どうしても範唱のように声が響かない」「高い声の出し方が分からない」「範唱のような声で歌うにはどうすればよいのか？」という壁が生じる。本題材においても，このような壁が生まれることが予想される。

⑶　手だて

そこで本題材では，声楽の専門家をゲストティーチャーとして招き，生演奏を披露していただく。響き，顔の表情，体の使い方などを実際に目にした子供は，驚きと憧れを抱くと考えらえる。またゲストティーチャーから技術的なアドバイスを与える場面を設けることで，子供が，「こんな表情で歌えばよさそうだ」「もっとブレスをとってたっぷり歌うことが必要なのだ」など，壁を克服する見通しをもつことも期待できる。こうした授業展開を教師がコーディネートすることで，子供の学びが実感を伴ったものになり，通常の授業よりももっと伸びやかな声で表現する子供の姿が表出することが期待できる。

4)　学習指導要領との関連

・A　表現　⑴歌唱　イ

・共通事項　ア：音色，拍子，強弱　イ：＞（アクセント），フェルマータ，mp,mf,f

5)　評価

ア　音楽への関心・意欲・態度	イ　音楽表現の創意工夫	ウ　音楽表現の技能
発声の方法や言葉の特性（アクセント，子音・母音の違い）に関心をもち，それらを生かして歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	《サンタ　ルチア》の音色，拍子，強弱などを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，曲種に応じた発声や言葉の特性を理解して，それらを生かした音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	曲種に応じた発声や言葉の特性を生かした音楽表現をするために必要な技能（発声，言葉の発音，呼吸法，身体の使い方など）を身に付けている。

6)　展開（全１時間）

Ⅲ　授業の実際

学習内容	○教師の働きかけと・子どもの学びの姿	留意点〔評価〕
身体の使い方，響かせ方を確認する。	**○ウォーム・アップをしよう。** ・身体がほぐれてきた。 ・腹筋でブレスを支えることを意識して《あくび》《犬のおなか》を歌おう。	・ストレッチをさせて心と身体を解放していく。 ・腰に手を当ててブレスの支えを意識させる。
音程を把握する。 発音を学ぶ。	**○１時間で，外国の歌を原語で歌えるようにしよう。先生の範唱を聴きながら，音程を把握しよう。** ・歌詞の発音が難しい。 ・音程がとりづらいところがある。 ・高い音が難しい。 ・だいたい，歌えるようにはなってきた。	・原語の歌詞の楽譜を配布する。 ・教師が範唱する。発音を聞き取らせながら，音程を把握させる。発音はカタカナで楽譜に記入させる。 ・音程が把握しづらいところは階名唱で練習させる。 〔ア　観察〕
曲の特徴（歌詞の内容，リズム，フェルマータ，強弱等）を把握し，歌い方のイメージをもつ。	**○だいたい歌えるようになってきたから，この曲の特徴を理解して，イメージに合う歌い方を追求しよう。** ・明るい港町の風景だ。 ・強弱の変化やフェルマータがあり，いろいろな景色がある。 ・この曲のイメージを表現するには，もっと響きをつけて歌うことが必要だ。	・単語の意味を確認し，歌詞の内容を理解させる。 ・歌詞の意味を確認し，風景を想起させる。イメージを明確にするために，場面に合う写真を提示する。
音色や身体の使い方，発声などの工夫を聴取する。	**○範唱を聴いてみよう。歌い方にどんな工夫が見られるだろうか。** ・声が明るい。 ・表情が豊か。 ・声が良く響いている。	・動画を提示し，歌い手の工夫をワークシートにメモさせる。 ・子供に発言を求め，板書し，考えを共有させる。 〔イ　ワークシートへの記述〕
音色や身体の使い方，発声などの工夫をもとに，イメージに合う歌い方を工夫する。	**○範唱で聴き取った歌い方の工夫を，自分でもできるように練習しよう。** ・頑張って声を出してみたけれど，うまく響かない。 ・どうしても範唱のようにきれいな響きにはならないな。 ・表情豊かに歌うのは難しい。 ・発音が良く分からないな。どうすればよいだろうか？	・板書の内容を視点に，何度か歌って見せる。 ・子供の変容を価値付けつつ，「もっと響きが明るくなるといいね」「もっと声が抜けるといいね」等，課題を整理して提示する。
音色や身体の使い方，発声などの工夫を聴取する。	**◎ゲストの先生に歌っていただき，歌い方の工夫を自分の目で確かめよう。** ・身体全体で歌うとはこういうことか。ブレスの意識が高いな。 ・表情豊かに歌っていて，迫力がある。 ・声の響かせ方がすごい。どうやればいいだろうか。	・子供に発言を求め，板書し，考えを共有させる。
音色や身体の使い方，発声などの工夫をもとに，イメージに合う歌い方を工夫する。	**◎ゲストの先生からアドバイスをもらい，歌い方を試してみよう。** ・腹筋で支えるだけでなく，息の流れを意識するとぐっと良くなった。 ・風景をイメージし，そこにいる自分を想像すると自然と表情が緩み，音色も明るくなる。 ・子音の発音の仕方が分かった。とても歌いやすくなった。	・これまでの子供の歌声についてコメントしていただくと共に，技術的なアドバイスをいただく。 ・子供の変容を価値付ける。 〔ウ　観察〕
自己の変容を振り返る。	**○今日の授業を振り返ろう。どんなことができるようになっただろうか。** ・息の流し方が良く分かった。普段先生からもらうアドバイスとは別の視点から専門的なことをたくさん教えてもらって，うまく歌えるようになった。音楽発表会でも高音の歌い方を生かして表現したい。	・ワークシートに記録させ，学びの成果を自覚させる。 ［イ，ウ　ワークシートへの記述］

実際の授業で鈴木は，19分間のレクチャーを行っている。その内容は，以下のようなものである。
中村：今日は大学の方から鈴木愛美先生にきていただきました。
鈴木:こんにちは。まずは私が,ナポリ民謡の《サンタルチア》を,最初にイタリア語,次に日本語で歌唱します。
鈴木：(中村の伴奏で,《サンタルチア》を歌唱する。)
鈴木:(自己紹介後)皆さんの素晴らしい音楽表現と,高い能力に驚いています。良かったことが3点あります。まず《あくび》の発声練習で，歌にとって大切な〈あくびの感覚を使って顎が脱力された〉美しい発声ができていました。次に，中村先生の旋律の音取りにしたがって，音を取る感覚が早く，能力が高いと思いました。そして一番大事なこと，皆さんの声が何よりも純粋で美しいことです。
「歌う」ということは，唯一自分の身体が楽器です。自分の身体を意識することによって，身体がだんだん温かくなります。そして身体で支えられた，低音から高音まで一本の線で繋がった美しい発声法で歌うことができます。
それでは，今日は皆さんと一緒に歌っていきたいと思います。もう少し工夫をすると，より音楽性のある素晴らしい《サンタルチア》を歌えるようになることと，皆さんにとって，より歌が好きになる秘訣をお伝えしたいと思います。
《サンタルチア》は,そもそもイタリアで生まれました。イタリアという国,聞いたことがあったり,知っている人はいますか。
生徒：(数人挙手)。
鈴木：ここは新潟の長岡です。少し想像してみてください。この日本の反対側，地球ぐるーっと周るとヨーロッパの国々があります。そのヨーロッパの南の部分に長靴のような形をした国があります。その長靴のやや下の方に,イタリアのナポリという街があります。私もイタリアに何年か住んで歌の勉強をしていました。それでは，イタリアといえば何が有名でしょうか。
生徒：ナポリタン，サッカー。
鈴木：そうですね！サッカーは，日本の長友選手が活躍していますね。イタリアでは，サッカーが大変盛んで，強いです。ナポリタンと出ましたが，食べ物はどうですか？
生徒：ピザ，オリーブ，ワイン。
鈴木:パスタ(Pasta),ピザ(Pizza),ティラミス(Tiramisù),ジェラート(Gelato),これら全てイタリア語です。それからド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド（ピアノを弾きながら歌う）の音階も，イタリア語からきています。では，街並みはどんなでしょうか。
生徒：石。
鈴木：そうです！青い空に，燦々と降り注ぐ太陽，そこに石畳の道が続きます。まるで街全体が絵画のようなんです。では，そこに住むイタリア人はどんな人でしょうか。
生徒：おしゃれ。
鈴木：そう，お洒落でかっこいいですよね！人柄も，大変陽気です！例えば，イタリアでは，私が一人でバスに乗っていて,何か困った顔をしていると「どうしたの？」話しかけてきてくれます。喫茶店(Bar)に入って一人でコーヒー飲んでいると,「チャオ！」と人々は話しかけてきます。それほどお話（コミュニケーション）が好きなんですね！
イタリア人は3つのことが好きです。「食べる,マンジャーレ(Mangiare)」「歌う,カンターレ(Cantare)」「人を愛する，アモーレ(Amore)」です。さて，今，皆さんに《サンタルチア》が生まれた国・イタリアについて，イメージを膨らませてもらいました。今度は，そんな陽気なイタリア人になったつもりで，実際に歌唱してみましょう。
それでは，立って下さい。足を肩幅に広げ，胸を張り真っ直ぐに立ちます。声を出すコツとして，グラウンドや体育館で遠くのお友達に話しかける時に「おーい！」と叫びますよね。これは，横隔膜を使った立派な発声法なんです。皆さんで声を揃えてやってみましょう！1・2・3！
生徒：(皆で)〈オーイ〉。
鈴木:身体全体から,大きな声が出ましたね。この辺りが動きませんでしたか。(横隔膜の辺りを触りながら)そう，ここには横隔膜があるのですが，今のような，この横隔膜を使った発声法の感覚を覚えておいて下さ

い。それでは，しっかりと楽譜を持って歌ってみましょう。
生徒：（鈴木と一緒に，《サンタルチア》を最初から原語で歌う。）
鈴木：（16小節歌った後）ありがとうございます。皆さん，声も良く出ていて，初めてのイタリア語にも関わらず上手に歌えています。素晴らしいです！そうしましたら，最初の「Sul mare」のSu（実際に発音しつつ）のSの子音を，先程の横隔膜の支えを使って，もう少し立てて発語できますか。
生徒：（鈴木の発音を真似る。）
鈴木：例えば，Sulmare luccicaの，「Sul」と「lu」ところに，少しだけアクセントSùlmare lùccica（下線部にアクセントをつけて，手の動作表現も伴い実際に示す）。
生徒：（鈴木のアクセントの表現を真似る。）
鈴木：L’ àstro dargènto（下線部にアクセントをつけて，手の動作表現も伴い実際に示す。3拍子のワルツのリズムなので，1拍目にアクセントがくるように歌い示す）。
生徒：（鈴木のアクセントの表現を真似る。鈴木とともに最初から歌う。）
鈴木：（一緒に歌いながら，個々の発音，歌の表現を，手や全身を使って指示をしながら，Sùlmare lùccica, L’ àstro dargènto, Plàcida e l’ ònda, Pròsper il vèntoのアクセントの場所を中心に指導する。次のフレーズで「Veniteの前で，支えを下すために，息をたっぷり吸います。」と指示。生徒と一緒に最後まで歌う。）
鈴木：高い音を楽に発声するコツとして，Veniteを歌う前に，しっかり息を吸えますか，（Veのところを範唱）。
生徒：（鈴木とともにVeniteから一緒に歌う。）
鈴木：（Santa luciaのフレーズの前で，「しっかり息を吸う」という指示をし，指揮をしながら一つ一つ丁寧に，全員で最後まで歌唱する。）
鈴木：そうです，だんだん皆さんの良い声が出てきました。イタリアの情景を想像しながら，明るく元気よく，身体からしっかり発声された声で，音楽表現豊かに歌うことができました。今日は，皆さんの素晴らしい歌が聴けて大変嬉しかったです。短い時間ではありましたが，皆さんに覚えておいてもらいたいことは，歌は身体全体で音楽を感じ，楽しんで歌うことです。加えて，音楽以外にも自分の好きなことや興味深いことがあったら，それらを真っ直ぐに一生懸命努力してみてください。一つのことに向き合ったり努力することを経験すると，それらが軸となり糧となり，きっと自分を成長させてくれます。それでは，今日はありがとうございました。

Ⅳ　音楽科授業及び教員養成への示唆

以上の実践と授業後の検討及び生徒へのアンケートから，音楽授業における歌唱表現を充実させるための方法論を探るとともに，教員養成における教科専門科目及び中学校音楽科授業双方に対する示唆について，以下の点から考察する。

1　技能習得における方法論と理論的背景

授業後の検討において，まず鈴木からは，岩河三郎作詞作曲の「楽しい発声のドリル」から《あくび》《犬のおなか》を用いた授業冒頭のウォーム・アップに対するコメントとして「子どもが音楽を吸収する土台，すなわち発声の基本ができている」ことが指摘された。教材曲が，口蓋をあけること，それをあくびのイメージで歌わせること，ドリルの音高跳躍やスタッカートといった内容が，横隔膜の使用や身体の支えといった基本を学ぶようにできていること，それらを生徒が難なくこなしていることへの驚きである。

一方，中村からは，「教材曲にはどんなポイントがあるか充分に書かれていないこともあるので，これでいいのか不安。チェックしてもらいたい。現場の教員は，この通り歌っても良い効果が出ないことがある。たとえば，横隔膜をどう使うかわからない。そういったアプローチの仕方について教えて欲しい」といった意見が出された。

これに対して，鈴木からは，横隔膜の支えや音色とポジション，音程との関係の説明やハミングや舌のコントロールの方法など具体的な方法とその理論的な背景が説明されている。これを受け中村は「子どもに教えるという前提で，そういうことが大学のレッスンであると良かった」とコメントする。

音楽授業における発声練習は，本授業冒頭になされたような教材曲を用いて行われることがしばしばある

が，この時担当教師が教材曲の意図と発声の技能習得との関係を理解していないと，単に教材曲を歌唱したことで終わってしまう恐れがある。音楽科教師に求められるのは，発声の方法論の獲得とともにその理論的背景についての理解である。「どのような発声の方法があるのか，なぜそのような方法を用いるのか，そういうことが大学のレッスンであると良かった」といった音楽科教員の不安と期待に対して，教科専門の授業は応える必要があるだろう。

２　教科専門の指導と音楽科授業とのずれ

大学での教科専門の指導と実際の音楽科授業とのずれについても話題にされた。中村は，「大学のレッスンで音楽の授業に結びつきやすいのは発声で，授業で用いている教材曲とはダイレクトにはつながってこない」と述べる。また，伊野は，「大学の専門教育で発声練習を習ってきた学生が，授業を担当した時に，発声練習からはじめる傾向がある」という現状を指摘する。大学での専門の授業が，「歌う意欲」を持った学生を対象としているのを前提としているのに対して，義務教育の音楽授業は，学習者の関心・意欲の醸成を抜きにしては考えられない。大学での声楽の授業が，発声法の獲得やオペラのアリアといった著名な歌曲の習得に重点が行われる傾向にあり，そうした中での学びが，学校の音楽授業に必ずしも直結しないことに対する疑問である。これに対して鈴木は「大学の指導の中で，曲をどのように自分で習得できるかを探っている。例えば，《浜辺の歌》《赤とんぼ》など，日本歌曲で教科書に掲載されている曲を，どのように歌うか，多様な実践方法の引き出しを持っていると良いと思う」と述べる。《浜辺の歌》《赤とんぼ》は，歌唱共通教材でもあり，大学の生徒が共通に学ぶ日本歌曲でもある。この鈴木の発言に対して中村は「とても大事なこと」と共感する。

教科専門の指導においては，このような教材を用いて表現の本質を学び，表現の「引き出しをたくさん持つ」授業が求められよう。また，例えばオペラのアリアの学びがどのように音楽授業につながっていくのか，特に，生徒の歌唱表現の指導に繋げる為の，教科専門の授業のあり方をどのようにすれば良いのかという点について，高度な技能習得とともに教科専門の授業のあり方を模索する必要があるだろう。

３　専門教育との方法論の違い～意欲との関係性

声楽表現の際の方法論についても，専門教育と学校の音楽授業との違いが浮き彫りになった。

鈴木は，「どんな曲でも，まずはハミング (ng)，その次は，ア～ (A)，ハ～ (Ha) と母音でレガートで歌う練習をする」こと，「まず正しいポイントに当てた発声とそれに伴った響き」が大切であることを強調する。「現場の先生は，声を出させることを第一に考えがちであるが（もちろんこれも大切な要素であるが），それでは，声の焦点が定まらないまま，音程の取りにくい，又，高音の出にくい発声になってしまう。まず第一に，焦点の合った響きの場所で発声できることが大切である。とにかく大きな声だけを出すということにこだわると，後々それが癖になってしまい，響きを上にもっていくことが大変難しくなる」「現場だと，歌う＝声を大きく，となりがちかもしれないが，合唱コンクールなどの本格的な曲を歌い上げるときに，そのようなやり方が癖づいてしまうと，高い音がはまりにくかったり，美しい発声が引き出しにくくなってしまう」と指摘する。

対して中村は，「現場ではまず声」，伊野も「意欲の問題もあり，現場ではまず声を出して欲しいと思う。小さな声をだすのはある程度意欲が持てたときになってしまう。最初から小さなのは，なかなか難しい」といった授業の現実を話す。

「まずは意欲を持って声を出すこと」から始まる学校の音楽授業のやり方に対して，「それでは響きを上に持っていくことが難しい」のであれば，声の表現において，学校の音楽授業は遠回りをしているわけで，結果的に子どもの表現力の伸長を押さえていることにもなろう。「まずは響き」をつくる方法も，学習者の意欲が伴っていてはじめて効果を発する。鈴木は「歌を歌う時，身体からしっかりと発せられた大きな声を求めることも大切であるが，それに加えて，正しい焦点に集めた位置での，正しい響きの発声法を忘れてはならない。たとえ最初声量が小さくても，根気強く修練することにより，響きが身に付き，声量もそれに準じて大きくなってくる発声法が大切である。そこの過程をどう詳しく埋めていったら良いか」と問う。

音楽表現における関心・意欲の問題と表現技能の獲得の問題は，表裏一体にあるのであり，専門教育にお

いては，こうした視点からの学びも必要になってくる。また，学校の音楽授業から見るならば，こうした専門的な指摘をどのように活かすか，例えば，小さな音や響きを大切にした歌い方から始める歌唱表現の可能性など，その方法論を実践的に示すことも求められよう。

４　授業構成における相互啓発

中村の授業を参観し，鈴木は，「先生の授業を進めるテンポ感が良い。生徒の集中や興味が反れる前に，すぐ次の課題へ進む」「生徒に映像を見せ，実践させ，問題意識を持たせたのが素晴らしい」と勉強になった様子を述べる。また，自身が担当した部分を振り返り，「授業をしてみて，15分程度で終わるかと見積もってきたのが，生徒の反応が素晴らしかったので脱線してしまった。もう少し発声練習をしっかり実践してから，温まった良い声で《サンタルチア》の歌唱に繋げたかったが，時間が足りなかった」と反省する。

音楽授業が生徒との関係性の上で成立し，限られた短い時間の中で進行していること，興味・関心を持たせ，問題意識を醸成する方法論の必要性と効果を実感した発言である。実際，伊野からは「生徒は最初（鈴木）先生の歌に興味がいった。けれども後半は生徒の歌いたい気持ちと先生の伝えたい気持ちがかみ合わなかった」といった指摘がなされている。一方で中村は，「生徒の興味がぐっと湧いたのは，鈴木先生が歌った時」であり，声楽家としての鈴木の演奏の素晴らしさ，豊かな表現力に生徒の心が動かされたことを指摘する。実際生徒のワークシートからは「声の出し方が素晴らしい。自分もあんな声を出して見たい」「プロの歌い方が聞けて，いっしょに歌えてすごく良かった」といった驚きと憧れの声があがっている。

また，鈴木は，「中村先生の授業を進める少し早いテンポ感は，生徒の興味を持続させるには大切だ」とした上で，自身の進め方について，豊富なコンサート経験を活かして「実際の演奏会では，早く話したり，話を短めに簡略化し過ぎると，聴衆が深くまで感動しないことから，演奏会では，ゆっくりめに伝わりやすく話すよう心掛けている」とも述べる。

音楽授業における音楽教師の生徒へのアプローチ法と，コンサートにおける演奏家の聴衆へのアプローチ法は全く異なるものではなく，音楽を届ける，表現するという意味においては，共に通じるものがある。授業においては，これらの良さを相互に学びつつ実践に活かすことが大切だと思える。つまり，音楽授業では，興味・関心を持たせ問題意識を醸成する教師の方法論を基にしつつも，いかに教師自身が表現力を持って伝えるか，より質の高い表現をどのように〈直接的に〉生徒に伝えるかといった視点が一層必要になってくる。したがって，教員養成では，学生の表現力を高めることに加え，そうした表現方法を自らの演奏を中心に，言葉による説明も加え，限られた時間の中でプログラムを構成し，いかに他者（生徒）に伝えていくか，ということを学ぶことが求められよう。

５　表現を深める方法論～どう伝えるか

表現を深める場面で，鈴木は，自ら歌いつつ説明をし，生徒と共に歌った。そうした行為の背景について次のように語る。

「《サンタルチア》のSulmare luccicaを歌う前のブレスは，〈光る海〉をイメージして息を吸う。例えば，教科書で取り扱われている《浜辺の歌》では，『あした浜辺を～』をどのような浜辺なのか想像し，その小節の前で呼吸と共に表現の準備をしておく。歌うフレーズの前のブレスが変わると，そのフレーズそのものが美しい表現で歌うことが可能となる。この習得法を一曲でも理解できていれば，全部に応用し実践できるのではないかと思う。」

「アクセントの指導は，感覚的に音楽のリズムから感じ取り歌っている。例えば，Veniteを，V̲è̲nìtè̲と一つずつアクセントを付けて応援歌のように歌ってしまうと，この歌の表現にふさわしくない異なった表現となってしまう。次のbarchetta（小舟）からは，barcaがボートで，chettaがイタリア語のより小さいという意味を指すので，chettaが付くことにより，より小さな可愛らしい小舟というイメージができる。barchetta mia,のmiaは『私の』という意味となり，『私の小舟よ』と，愛おしく大切に歌うことに繋がる。santa luciaは聖サンタルチア，港のサンタルチアを守ってくれる女神様のこと。女神様が守ってくれるという思いでサンタルチアと歌えば，壮大で美しいナポリに広がる港をイメージして，声を朗々と響かせ歌うことが可能となる。そうすると，聴き手も自然とその曲の魅力に惹きつけられる。」

ここでは，演奏家としての鈴木が相手の表現を深めるためにどのような方法論を持っているかを垣間見ることができる。第一に，歌詞を理解して明確に発語すること，曲のイメージを膨らませること，フレージングを含めた旋律の持っていき方（構造）の関係性を細かく把握すること，そしてこれらを表現技法と一体化させて捉えることである。鈴木の言う「一曲でも習得法を理解できれば，全部に応用できる」力である。第二に，そうした内容について（鈴木は感覚的に身に付いていると言っているが）論理的に整理し，演奏を含めて言語化して伝えること。そして第三に，実際に示範しつつ生徒と共に歌いながら指導することにある。

こうした汎用的なやり方が可能になるためには，音楽教師には，まずは発声法を修練し，歌詞や音楽の構造を理解し，自己のイメージとの関わりの中で音楽表現を工夫する能力，次に確かな技能を獲得するだけではなく，それを自らが歌い示し，相手に伝える能力，さらに生徒と共に歌い，相手の表現力そのものを高めて行く能力が必要となる。実際，授業で生徒の表現が最も高まったのは，鈴木のこうした能力が行為となった時であった。教師や教員養成の学生に求められるのは，このような全体的な能力を共通の方法論として身に付けることである。

６　深い学び，知識の更新，活用できる技能

新学習指導要領では，主体的・対話的で深い学びが期待され，音楽授業における学びの質の深まりが問われている。鈴木のやり方は，深い学びのあり方についても，重要な提案をしている。今回は，アクセントとブレスについての指導がその具体例となっているが，アクセントについては，luccica，dargento, l' onda, あるいは，Venite，とbarchettaの部分について，それぞれ，発語と歌詞のイメージと関連させながらアクセントの使い分けを具体的に歌いながら示す。それにより，同じアクセントでも多様な表情や技能上の工夫があることが学ばれ，生徒の表現上の深まりが見られた。実際生徒のワークシートには，「ちょっとアクセントをつけるとすごい上手に聴こえた」，「アクセントをつけると，より感情を込めて歌えた」，「アクセントを付けることで感情を表すことができた」といった学びが記述されている。こうした表現上の深まりついて中村は，「アクセントもいろんな深さがあるなど，学習内容が深くなればなるほど子どもはついてくる。そういう話は，専門家であればあるほどできる」と述べ，これに対して鈴木は，「フォルテ (f) 強く，ピアノ (p) 弱く，と教えると，強くと弱くの一辺倒に歌いがちである。ピアノは，フォルテと同じエネルギーだけれど，（やさしく），（やわらかく），など色々な表現のバリエーションがあっていいと思う」と応える。音楽授業において，アクセントは「目立たせて」，フォルテは「強く」とだけ覚え，表現をしていく傾向がある現状を鑑みれば，今回のような指導は大きな意味を持つ。

このことはまた，今次改訂で期待される，「知識の更新」や「活用できる技能」とも深く関係してくる。中教審答申（中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」）では，「知識」について「新たな学習過程を経験する」ことを通して「更新されていくこと」や「生きて働く概念として習得されること」が重要であるとしている。また，技能についても，「一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず，変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくことが重要」としている。前事例でいえば，アクセントという知識が更新され，音楽表現において汎用的に活用できる技能の習得に，生徒の学びが方向付けられたということができよう。

音楽授業においては，確かな演奏技能の裏付けの上にこのような表現の深まりを指導することができる教師の能力が求められよう。

Ⅴ　おわりに

以上，教科専門教員との協働による音楽授業実践を通して，教科専門教育と学校の音楽授業のあり方について検討してきた。今回の試みは極めて小さいものであるが，その意味するところは大きく，教員養成大学における教科専門授業に期待される内容や学校の音楽教師に必要とされる力が少なからず浮き彫りになった。今後，教科の指導法との連動も考慮しつつこうした取り組みを重ね，大学や小中学校等の授業相互の改善を目指していきたい。

引用文献

中央教育審議会答申 (2012)「教職の全体を通じた教員の資質・能力の総合的な向上方策について」
森脇憲三（1979)「教員養成大学・学部の音楽教育」『音楽教育学の展望』日本音楽教育学会編，pp.292-306.